広島俳句倶楽部

令和五年九月作品集

出雲

高尾ひとみ

国際化を学ぶ研修所で三か月寝食を共にした仲間が、出雲で同窓会を持ちました。数えてみると、ちょうど三十年前。顔を見てわかるだろうかと心配したのも束の間、足立美術館では庭に臨むベンチで話し込み、夜は昔のままに飲み、歌いました。

翌日は、地元の人の計らいで出雲大社（いずもおおやしろ）の正式参拝です。お祀りする大国主大神様は、生きとし生けるものがともに豊かに生きるよう、結びつけてくださるといいます。その温かな御縁を心に刻んだ出雲でした。

八雲立つ出雲に吹けり青田風

宍道湖にまだまだ高き大西日

それぞれの三十年や星涼し

国引きの浜（稲佐の浜）に夏日の容赦なく

車椅子押す白シャツの背の広き

紹袴の神官に真榊を受く

涼風や楼門に友垣と居り

磐座（いわくら）にそつと手を置き夏惜しむ

斐伊川（ひいがわ）の風にゆれをり稲の花

また会はむ旅の終りの大夕焼

《作品鑑賞》

井藤 希

三〇年ぶりの同窓生たちとの旅。少し不安でもあるのだが、会えばすぐに昔に戻って打ち解けるのが嬉しい。この同窓生たちと巡る出雲は格別な夏の思い出となったに違いない。そのような心情が真直ぐに伝わってくる高尾さんの作品である。

八雲立つ出雲に吹けり青田風

「八雲立つ」の枕詞で出雲の歴史の深さとダイナミズムが一挙に迫ってくる。その中で青い稲が風に揺れているという、静かだが生き生きとした今の風景に旅への期待感が高まる。古来より人々が営々として築いてきた出雲国への賛歌とも思える句である。

車椅子押す白シャツの背の広き

「白シャツの背の広き」が味わい深い。出雲大社での参拝の光景だろうか。雲に分け入ると詠われた大社に参拝する車椅子とそれを押す大きな背中、夏の光りの中の森厳な風景が見えてくるようである。

磐座にそつと手を置き夏惜しむ

旅の終りでもあり夏の終りでもある。多くの思いが去来する中で作者は敬虔な気持ちで磐座に触れてみる。「そっと手を置き」に過ぎ去ろうとしているものへの愛惜の思いが静かに伝わってくる。

夏蝶の花吸ひに来る大路かな
大路へと開け放たれて夏座敷
讃岐から吉備へと伸びて夕立雲
ゆく夏の大路を歩きやや寂し
神山に立てば広がる青田かな
目を瞑り蝉の声聞く神の山
備後まで及んでゐたり野分雲
備中にひと日野分を聞くもよき
湯浴みして又聞いてゐる野分かな
野分止み聞こえてきたる蛙かな

佐保光俊

雨降つて過ごしやすき日藤袴
川底に大き野鯉や秋の水
車椅子のまま手を伸ばす忘の草
天心に木星ありて秋の暁
遠嶺より昇る朝日や早稲香る
鉄塔の影連なれり秋夕焼
様々な雲を浮かべて秋夕焼
車から降りて歩けり星月夜
天の川高き嶺へと流みゆく
スマホにてラジオ聞きをる夜長かな

村上正人

夏至の雨やんで夕空晴れ渡る
今年またこの庭に咲き百日白
百日紅かくも厳しき日を受けて
夏の月真夜に覚めれば満ちてをり
おはぐろの朝の川に沿うて飛ぶ
青田風どこかに水の音のして
合歓の花戦は果てて川残り
少しづつ近況語る墓参
すぐ蝉に消されてしまふ虫の声
処暑の川波は海から入り来る

髙尾ひとみ

誘ひ合ひ野の道を行く彼岸寺
杖ついて背筋伸ばせば蜻蛉くる
虫時雨聞かんと庭に車椅子
小鳥来る樟の大樹のにぎにぎし
配達士の皆が褒めゆく秋明菊
星月夜つかまり立ちの子を支へ
秋澄むや不夜城のごと工場の灯
子ら集ひ祝うてくれし敬老日
鵙来て頭上の熟柿突きけり
家も野も秋夕焼に染まりけり

あざみ

月涼し小さきダイヤのネックレス
関節の傷口疼く暑さかな
クレマチス一気に咲いて仕舞ひけり
行く夏や脚長き鳥川歩き
竹垣を風の通れる秋隣
一本の紐に朝顔巻き付いて
横断の先を飛び行く秋の蝶
切り分けし後の白桃にかぶりつく
蜂蜜の小さき空き瓶秋の声
粘り気のある草を抜く九月かな

亜矢

風鈴の石山寺に筆揮ふ
盆帰省良き嫁などと由無し言
幼子のまこと軽やか盂蘭盆会
腕捲る叔母の馳走や秋鯉
赤ん坊の蹴り足激し敗戦忌
金鯱城見上ぐ色なき風の中
転校の学舎で思ふ里の秋
終活の進む書斎や秋の昼
孫くれしお喋り人形月さやか
月光とともに画集をめくりたり

綾乃

夏の果千畳閣に座りをり
秋立つや川瀬の魚の影太し
球場の歓声にふと秋の風
天の川夜更けに雨の上がりたる
彦星に勝れる思ひありし日よ
畝雲や遠き野分の寄越せしか
大川の尽きぬ流れや墓洗ふ
鳳仙花隣は孫の来たるらし
犬伏せて点滴受くる九月かな
遠山へ流るる雲の秋めけり

井藤希

仏花切る鋏の音や秋の朝
眠られぬ夜に続きぬ稲光
赤蜻蛉バイクの籠に来て止まる
鶏頭が目より高きに畔の道
風荒ぶ岬の先に草の花
合しては濁ることなき秋の水
松虫の高きに鳴いて夕間暮れ
懐かしき手跡の文や秋の夜
草の絮貨物列車の長くして
列車去り乱れて揺るる秋桜

栄吉

ゆったりと塀越えてゆき黒揚羽
百日紅年経るごとに花の増え
どこからか台湾百合の来て咲きぬ
巣の上で虫を待ちをり女郎蜘蛛
女郎蜘蛛じっとしてをり静かなり
裏庭に芽を出してをる茗荷の子
茗荷の子鰹のたたきに添へて出し
いつの間に虫の鳴く夜となりにけり
藪蘭の咲いて賑はふ木蔭かな
鰯雲鉄塔の上覆ひけり

大畑恵

今朝からは秋の風よと夫の言ふ
八月尽旅の絵葉書届きたる
ガード下抜ければやをら虫の声
山峡の朝露に濡れ稲実る
草の花人屋見えぬ県ざかひ
石段に落ち団栗のまだ青し
秋手入れ済んで木の香の庭となる
栗拾ひ道はいつしか行き止まり
名月や島は堺へ川を越え
仕舞湯の窓を照らして今日の月

暁子

隣人と外掃き終へて鮎を焼く
髪染めを止めると決めて涼新た
赤蜻蛉田んぼを越えて庭に来し
勝手口開けて虫の音聞きゐたり
稲の花匂ふ道押す乳母車
軒下の椅子に座りて稲田見る
車椅子触れて砂地に萩こぼる
公園の椅子から見上げ藤は実に
秋の花植物図鑑広げをり
天高し道の小石を杖で除け

すみれ

道すがら寄る友の家花石榴
水動く方に流灯押し出だす
高きより鳥の声する秋の朝
青き実の棟にふれて朝の道
川土手に並んで座り秋の朝
秋の雲映す川へと足浸す
舟を漕ぐ人に声かけ秋高し
顔過り蜻蛉たちまち川に消ゆ
鰯雲見上げつつ行く母の家
崖道をさらに外れて茸狩

知佳子

母の居ぬ庭に花火をしてをりぬ
母が家の川土手で見る夏の星
紫蘇の葉を一枝づつ摘む女の子
町へ行くバスを待つなり紅芙蓉
畦草を全部刈るなり盆支度
墓洗ふ母のしていた段取りで
三日間盆花を切り供へけり
昼食をとりて娘と稗を刈る
稗刈りを全て終へるや月の出づ
真夜中に一匹の虫鳴いてをり

ちどり

草刈りの音のしてゐる花薊
信州に味噌蔵多し一位の実
木曽谷の旅の途中の残暑かな
蓼科山にまづ挨拶やすすきの穂
木洩れ日や森に入りたる秋の蝶
藤村の詩口ずさむ七竈
空と海同じ色して葉月かな
八月尽車窓に見ゆる東寺かな
満月の色増す時を一人かな
一人見る満月色を深めつつ

辻純江

今日もまたどさつと散れる牡丹かな
バス停に汗を拭きつつ挨拶す
看病の庭の明るき月の夜
萩の花横へ下へと伸びてをり
蟷螂の草叢に吾睨みをり
玄関に芋と団子を供へたる
月見豆皿に添へたる今日の膳
良夜かな家族揃うて数珠を手に
満月にひと日を終へて座りけり
とろろ汁と言うて夫は膳に着き

雲雀

秋の海ブイだけ残る水平線
秋の波三度に一度飛立ちて
秋の浜砂に線引く帰り道
銀杏散る窓はかつてと同じ窓
店員が羨ましいというビール
ジャケットを傘にしている居待月
寝待月黒きタールの海に船
人の波一方向へ街の月
パーキング誰もいなくなる観月
月白に向かい渋滞途切れてく

ふじ女

海猫の声の近づく日御碕
海猫のみな横顔で浮いてをり
一本の足の生きてる兜虫
蝉の駅仕事帰りの人の波
蝉絶叫みんなうるさいだけなのに
太陽に照らされ蝉の骸かな
蒲の花鮨屋の桶に五六本
秋暑し詫びて造花を墓に挿す
蜩の鳴いてひとまづペンを置く
かなかなや夕餉に青菜切りをれば

松田裕子

水浴びの子供見てゐる日曜日
日向水通園バスのもう着くか
歓声は最後となりぬ尺花火
つくつくし応援団への礼深く
しばらくは園に揺れをり絵灯籠
風少し強くなりたる野分かな
水撒けば庭に寄り来る赤とんぼ
呼鈴に内より答へ秋簾
湯の町のすみずみ濡らし秋黴雨
レコードの洩れくる路地や秋灯

森口良樹

蜻蛉飛び田んぼの上に朝の月

三叉路に迷ふ裏道昼の虫

見る度にくすぐったくて猫じゃらし

竿伸べて久伸のうつる鑑日和

朝露に濡れし下駄脱ぐ勝手口

外国の言葉も交じり夜学かな

百年の古木の柿を鴉食ぶ

我が母校高きに登り眺めたり

星の降る夜長はLP盤を聴く

山野ウタ

日が落ちて蜩の声なほ高し

葛の葉や瀬戸に向かひて鐘を打つ

台風の去つて輝く夜空かな

静かなる満点の星台風後

空青し台風一過の物干し場

藪からし傾いてゐるカーブミラー

秋の風頬に受けたるガーデニング

大原良子

葛の葉の小屋を包んで蔓延りぬ

石垣に垂れ下がりたる葛の花

墓の前零れた種の葉鶏頭

住む人も居なくて芒揺れてをり

新米を貰ひさつそく仏飯に

牧草に露のあふれて朝日差す

夫が居て花野歩きし遠き日よ

紀英子

打ち広げ布団綴ぢきり萩の庭

萩の咲く日向に二人して立ちぬ

物縫うて日がな過ぎけり萩の家

秋の水掬うて鎌を研ぎにけり

月に出て納屋の扉を閉めにゆく

越して来て若夫婦住む萩の家

四方山のこと聞きながら障子貼る

桑門わかこ

山里にかなかな鳴いて父帰る

一輪の色濃く咲きぬ秋薔薇

秋涼し友との電話長くなり

米を研ぐ厨に聞きぬ虫時雨

秋の蝶風に吹かれて舞ひ上がる

久々に姉妹集へる秋彼岸

美耶

猛暑かな胸に打撲のサポーター

猛暑続き閉ぢ込められし人のあり

電気消しばし稲妻見上げたり

蕊し蕊しのふと吹く風に秋の在り

名を知らぬ草花咲いて秋となる

須美れい

風邪の身の熱の下がらぬ夏の果

立ち止まりここにも居たか虫の声

椋鳥の今日もここへと集まれり

蓮の実に一羽の雀止まりたり

上島康子

百日草我が背丈ほど伸びにけり

浴室の窓の向うに虫すだく

山裾の芒の穂先風に揺れ

笹の葉の音なく落つる秋の暮

河原静子

川風に乗りて蜻蛉の群れてをり

源流へ上るトロッコ萩日和

秋彼岸島の港に舟を寄せ

熊谷ゆり子

坂道の家ごとに見て百日紅

夫植ゑし葡萄一房供へけり

祝はるる電話の中に虫時雨

高嶋絹代

台風の過ぎてなほ来る風のあり

朝顔の咲き乱れたる庭静か

沈む日を待つて昇るか盆の月

民

竜胆の絵手紙送る友のあり

秋日なり景色見ながら歩こうか

金川昭子

雨止みてこんなところに蜘蛛の網
新涼や有や無しやの夫の髭

友岡葉山子

糸瓜忌や路地を幾たび曲りたる
新しき校舎に集ひ夜学生

撫子

初盆の長電話する友の居て
稲妻に山の鉄塔光りたる

みさ子

大空に学童の声九月かな

仰向きに背筋を伸ばす秋の宵

やす保

夕飯後栗の皮剥き夜中まで

もう一度ベランダに出て今日の月

山崎桂子

令和五年八月度作品集より

あざみ　私の選んだ十句

鉄産みし山から吹いて夏の風　佐保光俊
宵毎に母の衣類を夜濯す　村上正人
夏風邪の一人の部屋の広きかな　髙尾ひとみ
その影に立てば揺れたる青楓　亜矢
如何様に生きるもよろし鰻食ぶ　綾乃
村の灯のつつましきかな天の川　暁子
旅の宿寝返り打てば早星　すみれ
新しき駅に木の香や秋涼し　知佳子
小流れを歩いて上る水遊び　ちどり
逝きし子の部屋そのままに秋海棠　森口良樹

井藤希　私の選んだ十句

おはぐろに毬つきの音続きをり　佐保光俊
お隣と違ふ色咲く百日紅　村上正人
夏風邪の一人の部屋の広きかな　髙尾ひとみ
手花火を皆んなで持ちて終りとす　あざみ
その影に立てば揺れたる青楓　亜矢
かなかなや湯宿の浴衣ゆるく着て　辻純江
大山の夏野に両手広げけり　雲雀
滴りの水輪が雲の影揺らす　森口良樹
白波の崩れて匂ふ土用かな　山野ウタ
蜘蛛の囲の万華鏡めく朝日かな　友岡案山子